

陳舜臣さんを語る会通信

NO.112 Apr. 2024

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel.078-911-1671

編集「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2024年4月1日

<http://www.eonet.ne.jp/~yuzo/>

陳舜臣生誕100年記念特別展「神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣」報告

陳舜臣生誕100年記念特別展を1月31日～2月24日の会期で開催し、309名の入館がありました。陳舜臣さんは「戦争も平和も、災害も繁栄も、私はいつも神戸とともに経験した。神戸のなかに私があり、私のなかに神戸がある」（『神戸わがふるさと』『神戸と私』）とおっしゃっています。展示のタイトルもこのことばから来ています。このことを13枚のパネルで表現しました。内容は次のとおりです。（編集委員 橘雄三）

種別	内 容		
パ ネ ル 展 示	1	神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣	神戸のなかに私があり、私のなかに神戸がある ハイカラで思いきりのよさが神戸の身上 東京転居を諦めた理由 司馬遼太郎の一言!?
	2	陳さんの引っ越し歴1	11回に及ぶ引っ越し 一覧表と地図
	3	陳さんの引っ越し歴2	海岸通りの"三色の家" 蔡家と同居した北野町 新婚生活が始まった布引町の実家
	4	陳さんの引っ越し歴3	訪問客が多かった山本通の家 伯母野山の新邸 住吉川ほとりのマンション
	5	作品に描かれた神戸1	三越のショーウィンドウから消えた赤い靴 元町通のすずらん燈 栄町三丁目の"装甲ビル"
	6	作品に描かれた神戸2	図画の時間、屋上から描いたトア・ホテル 須磨寺に立つ子規の句碑と陳さんの詩碑
	7	作品に描かれた神戸3	『枯草の根』ほか"陶展文もの"の舞台
	8	作品に描かれた神戸4	北野町『他人の鍵』の舞台
	9	作品に描かれた神戸5	山本通『凍った波紋』の舞台
	10	華僑社会に生きて1	植民地期に日本へと渡った台湾人の戦後
	11	華僑社会に生きて2	神戸中華同文学学校創立90周年祝辞ほか
	12	華僑社会に生きて3	『落地生根』巻頭文
	13	作品に描かれた神戸6	作家陳舜臣さんが再度山に登ったのはCルート
海外 出版本	海外出版本（中国4冊、韓国6冊）及びボード貼り表紙画像（中国7点、台湾2点）		
陳作品 画像	【T氏の書架にみる陳舜臣作品の全貌】陳舜臣作品を推理小説、小説（一般）、エッセーほかに3分類し、それぞれを単行本発行年順にならべ撮影。これをA3横置きに印刷し繋いで展示。例えば、『阿片戦争上中下』を1作3冊と数えると、撮影総数は166作206冊		

陳舜臣さんの神戸愛 紹介 生誕100年、神戸でパネル展

直木賞作家陳舜臣さん(1924～2015年)とふるさと神戸とのつながりをパネル展示などで紹介する特別展「神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣」が神戸市中央区海岸通3、神戸華僑歴史博物館で開かれている。推理小説に登場した場所の現在の写真などが、陳さん自身の言葉とともに並ぶ。

陳さんの生誕100年に合わせ、同館などが企画した。元町駅周辺や北野異人館街など、陳さんの引っ越し歴を紹介しているほか、作品の中に何度も登場し、陳



さんも楽しんだ再度山登山ルートなども解説。国内外で刊行された著書や翻訳書の表紙なども見ることができる。

パネルづくりに携わり、ネットで「陳舜臣さんを語る会通信」を発行している橘雄三さん(81)＝明石市＝は「神戸を描いた推理小説は、中国が舞台の作品と比べておおむね短く読みやすい。今回の展示を通じ、陳さんの作品に触れてみたい人が増えればうれしい」と話す。

16、17、21、22、24日の午前10時～午後5時。一般300円。同館☎078・331・3855

(井原尚基)

陳舜臣さんゆかりの地図などを紹介する橘雄三さん＝神戸市中央区海岸通3、神戸華僑歴史博物館

神戸新聞(2024.2.16)

13枚のパネルのうち3枚を、2、3、4頁で取り上げました。

陳舜臣生誕100年記念展 No.1

神戸を愛し神戸に生きた陳舜臣

神戸のなかに私があり、私のなかに神戸がある

戦争も平和も、災害も繁栄も、私はいつも神戸とともに経験した。

神戸のなかに私があり、私のなかに神戸がある。

『神戸わがふるさと』『神戸と私』

ハイカラで思いきりのよさが神戸の身上

神戸はその大胆な軽い精神で、新しい海外文化のパイオニアをつとめているうちに、独特の文化をつくっていたのである。それをハイカラと呼んでもよい。

『神戸ものがたり』『水と火』

私は神戸人のもつ、思いきりのよさが好きである。薄っぺらとか、おっちょこちょい、といわれるが、その軽みは一つの貴重な資質であるようにおもう。

中国の古いことを研究する学者が、神戸から輩出している…。

神戸の新しさ、軽さ、西洋志向などが、一種の反対バネとなったのではないか…。

歴史の浅いまちなどといいながら、もう開港百二十年（※1988年執筆）をすぎた。

神戸もそろそろ厚みをもってよい時代になったようだ。

そこから、別のもっとすばらしい魅力がうまれてくるかもしれない。

『含笑花の木』『神戸の魅力』

東京転居を諦めた理由 司馬遼太郎 の一言！？

父は作家になって幾度となく東京に引っ越すことを考えていた。

毎年のように家族会議をしては結局神戸から離れないでいた。

大学時代からの友人である司馬遼太郎さんが、神戸の北野町にあった我が家に

よく遊びに来られて、父の書斎にこもって長々と話をしていた。

部屋の中はタバコの煙が蔓延していて、私や妹がお茶などを持ってドアを開けると、

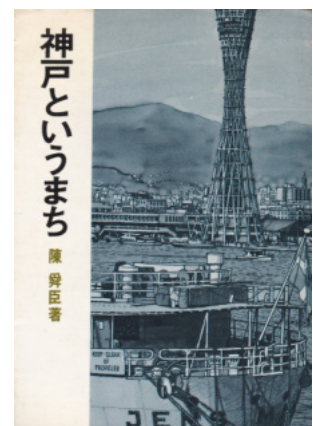
煙で咳こむほどの大変な状態だった。

「神戸、関西から離れるのは賛成できないなあー」と司馬さんに言われたのが

東京行きを諦めた大きな理由だったかもしれない。

『かまくら春秋 No.579』（2018年）陳立人（舜臣氏令息）「父との歴史の旅」

■『神戸ものがたり』『まえがき』に「神戸のことを、私がはじめてまとめて書いたのは『神戸というまち』（至誠堂新書）と題する作品である。昭和40年、すなわち1965年の発行で、小説家として出発した私にとって、小説以外では処女作であった」と記述されている。神戸のまちについて、多面的に表現されていて読んでいて痛快である。歴史的、環境学的、建築的、社会学的…総合的にそのシーンを心に浮かべることができるので飽きることなく読み終えてしまう。私が神戸っ子だからかもしれない。(M)



【三越のショーウィンドウから消えた赤い靴】

私の記憶は元町七丁目から始まる。あるいはここが私の生家かもしれない。いまはもう道路になっている。旧三越百貨店のならびの家で、むかいは酒造会社の倉庫であった。

近いので三越にはよく遊びに行った。一階のショーウィンドウに赤い子供靴が飾ってあり、それを母にねだると、私の足よりだいぶサイズが大きいので、もうすこしたってから買ってやるということだった。子供心にも誰かが買ってしまえばなくなるじゃないかと心配して、毎日のようにたしかめに行った。ところがその赤い靴が忽然と消えて…。(『道半ば』)



▲1935年ごろの三越神戸店（神戸新聞社提供）

元町通西入口に店を構えていた。三越前に市電が見える。

【元町通のすずらん燈】



東京あたりでは、神戸といえば年配の人はすぐに元町のショッピングを連想するようだ。それほど神戸のモトマチは、ほかの土地の人にも親しまれている。

東の一丁目から西の六丁目にいたるまで、鈴蘭

型に電燈をいくつもぶらさげた燈柱がならび、雨の日などは、とくに風情があった。元町情緒のなかで、雨の日が最高だったのではあるまいか。雨に濡れた歩道のうえに、燈火の影が映って、それが思い思いにゆがんでいた。

しかしいまはそんな風情もなくなった。戦災後、鈴蘭燈はついに復活しなかった。しかも元町は、もう雨に濡れることもなくなった。アーケードがすっぱり歩道のうえにかぶせられたのだ。

(『神戸ものがたり』)

〔昭和初期の元町通（神戸市立博物館所蔵） 田井玲子著『外国人居留地と神戸』（2013 神戸新聞総合出版センター）は「雨の元町 すずらん燈 濡れて光った アスファルト …」の歌詞で始まる「神戸行進曲」（土屋健作詞・中山晋平作曲）を紹介している。

【戦災にも焼け残った装甲ビル】

空襲で五丁目の我が家も仁記も灰燼に帰した。三丁目の「新瑞興」だけは焼け残った。これはただの幸運ではない。やはり福建系の有力商館であった新瑞興は、私が生まれた年、大正十三年ごろに新しい店舗を建てはじめたのである。前の年に関東大震災があり、店主の周さんは、どんな大地震にも耐えられるように、鉄筋三階建の建物を、まるで地面に匍いつくばるかんじに設計し、柱などもやたらに多くつくった。地震に備えたのが、空襲にも有効であったのだ。私たちは装甲ビルと呼んでいたが、コンクリートも必要以上にぶ厚かった。

戦後、周さんはもはやこの怪物のような店で商売をしなくなった。電報のやりとりで

きる繊維がメインラインだったので、山手の自宅でも、けっこう商売ができたのである。この新瑞興の御曹司の周達生君は、商売をやらないうで、民族博物館の助教授になり、学者の道にはいった。

(『曼陀羅の山』「青雲の軸 雑談」)

■「新瑞興」が使用しなくなり、岸本産業株式会社(現社名：K I S C O株式会社)に譲渡。



旧「新瑞興」ビルの現状
(栄町通3丁目)

植民地期に日本へと渡った台湾人の戦後

【日本統治期、台湾人の日本への渡航と定住】

日清戦争のあと、1895年4月の下関条約によって、日本は台湾を領有しました。台湾に住む人びとにとって日本は「内地」となり、日本統治期には多くの台湾出身者が「内地」へと渡り、勉学や商売に励みます。神戸は基隆と航路で結ばれており、この時代、台湾から船でやって来た人の大半は、まずこの神戸港に降り立ちました。1940年、台湾住民の日本内地渡航者は3万人を超え、神戸にも陳舜臣一家をはじめ数多くの台湾人が暮らしていました。東京は留学生が多く、神戸は商売を営む台湾人が多いのが特徴です。また太平洋戦争中には8000余人の台湾の少年が、神奈川県の大和市に渡り、海軍工廠で戦闘機の製作に従事していたことも忘れてはなりません。

【終戦直後、台湾人の帰郷】

1945年8月、日本が降伏し、第二次世界大戦は終結しました。朝鮮半島・台湾などの植民地は「大日本帝国」から切り離され、10月、台湾は中華民国に接收されます。終戦直後、日本で暮らしていた台湾人は、自らの手で同胞の權益を守るべく、日本各地で互助団体を立ち上げます。

神戸も例外ではなく、陳義方、黄万居、陳長崎が中心となり1945年10月9日、「台湾省民会」（会長：陳義方）が発足しました。台湾省民会は兵庫県下在住の台湾人の把握に努め、省民証の発行、台湾行きの手配、闇市での自警団活動、行政機関への陳情などを行っていました。

日本在住の台湾人のうちには、戦後、台湾への帰郷を選んだ者もあり、神戸で育った陳舜臣青年もその一人でした。陳舜臣は自伝『道半ば』のなかで、台湾に「帰郷」した日の出来事を、神戸台湾省民会の存在についても触れながら、次のように述べています。



「在日台湾同胞への急告」
『神戸新聞』（1945年9月28日付）

昭和二十一年（一九四六）の二月、神戸から帰国船に乗るのは百五十人ほどであった。神戸から船が出るのではなく、旧軍港の呉からであった。我々は神戸から「汽車」に乗って呉にむかった。神戸駅には大ぜいの人が見送りに来ていたが、台湾省民会の幹部の人が数人、呉までついてきてくれた。神戸から汽車に乗ったのは、阪神間在住の台湾人だけではなかった。神戸発の汽車の時刻はあらかじめ知らされていて、台湾省民会または各地の華僑総会で帰国証明書をもらった人は、たしか汽車賃も船賃も無料であった。神戸在住の人たちのほか大阪、京都の人たちもいた。

1946年6月22日、中華民国政府は「在外台僑国籍処理弁法」を發布し、在外台湾人の「中国国籍」回復を正式に認めます。この前より、日本においては大陸出身者の組織である「華僑総会」と、台湾出身者からなる「台湾同郷会（省民会）」の統合に向けた動きが議論されていました。弁法の發布後、この動きは加速します。神戸では1946年11月に神戸華僑総会と台湾省民会が合併し、「神戸華僑総会」として一本化されました。

【故郷台湾の混乱と冷戦の影響】

在日台湾人は、台湾同郷会と華僑総会の合併を契機として、華僑組織を牽引する存在になっていきます。それは植民地下を生き、さらに留学生の層が厚かったことなど、日本語を解しかつ知識人が多くいたことと無関係ではありません。また日本でメディア事業を展開する台湾人も多く、雑誌等で故郷台湾や中国大陆の政治情勢や行く末について、活発な議論を展開していました。

1947年、台湾で二・二八事件が発生し、台湾住民と台湾を新たに統治することになった国民党との間に軋轢が生じます。中国大陆では国共内戦が再開し、中国共産党が優勢となり、1949年に北京で中華人民共和国が成立し、12月には国民党が中華民国の中央政府を引き連れて台湾へと撤退します。これは在日華僑を政治的に二分させます。

1950年代、日本在住の台湾人の一部には、国民党に不信感を抱き、中華人民共和国に期待を寄せる人も少なくありませんでした。陳舜臣の神戸の家族も同様で、妹の陳妙玲は1953年に北京へと向かいます。1957年、神戸で中華人民共和国を支持する神戸華僑聯誼会（会長：陳義方）が発足した際、陳舜臣の父である陳通もメンバーとして活動を支え、1969年には会長に就任します。1949年に台湾から神戸に戻った陳舜臣もこうした時代の影響を受けていました。そして1972年の日中国交正常化以降、陳舜臣は「祖国」を中華人民共和国と捉え、日中友好の必要性に関しても「華僑」として積極的に発言をしていきます。